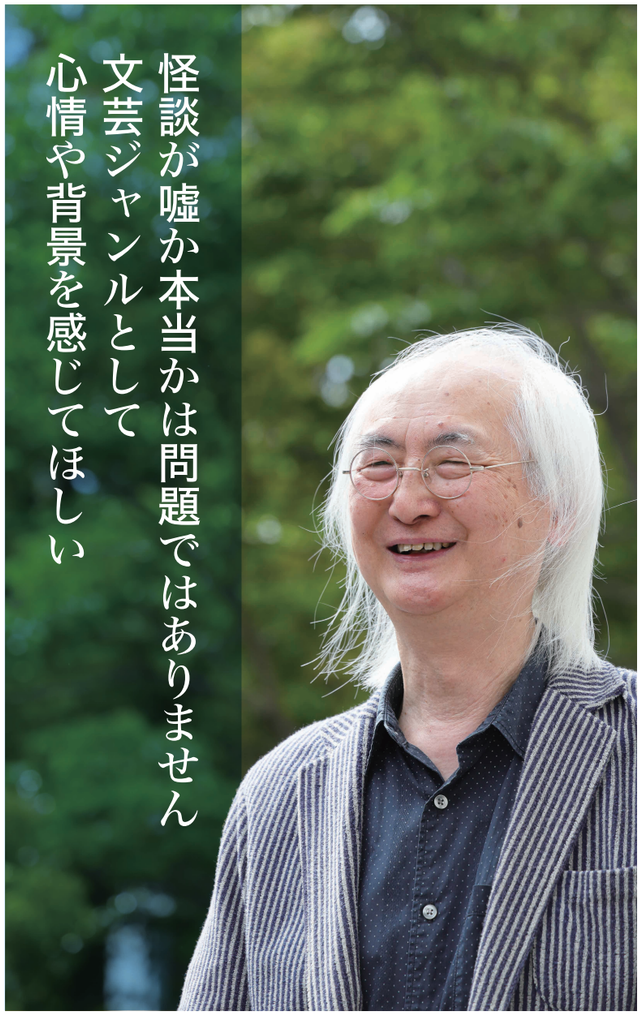
教えてセンセイ

堤邦彦先生に聞く〈怪談の話〉

怪談が嘘か本当かは問題ではありません 文芸ジャンルとして心情や背景を感じてほしい



堤 邦彦

（つつみ くにひこ）

1953年東京都生まれ。京都精華大学人文学部で長く教鞭をとる。現在、同名誉教授。慶応義塾大学大学院文学研究科博士課程修了（文学博士）。世の中の役に立たない（と見做されてきた）怪談研究をライフワークとする。『江戸の高僧伝説』（三弥井書店）、『江戸の怪異譚―地下水脈の系譜』（ぺりかん社）、『女人蛇体―偏愛の江戸怪談史』（角川文芸出版）、『現代語で読む江戸怪談傑作選』（祥伝社）、『京都怪談巡礼』（淡交社）など。2015年より怪談朗読団体「百物語の館」の元締めとして、各地の神社仏閣において古典怪談を読む会を主宰。怪談文化の普及をめざす。

江戸時代、怪談エンタメの花が開いた

いつの世も怪談や怖い現象は人々の関心を集めます。私はなぜ怪談が生まれ、長く語り継がれてきたのか、文学の立場から人の心のうちを探求してきました。すると必ず聞かれます、「その怪談は本当か、作りものか」。文学の世界では真実か、そうでないかは、さほど重要な問題ではありません。まったくのフィクションでもいいのです。真実にこだわるあまり、無味乾燥になってはおもしろくないですから。しかし、怪談がすべて嘘と言い切れるなら話は簡単ですが、なかには疑わしいものが紛れています。たとえば宗教で語られる怪談は非常にリアルで、本当らしく聞こえてしまいます。神がかった事象を「無い」と証明するのも難しいわけで、本当を前提とするから宗教が成り立つのですね。昨年、怪談和尚の異名をもつ人と対談しましたが、先方は宗教者だから「霊が見える」立場で話をされます。そこに異を唱えると平行線のままなので、スタンスの違いと捉えるようにしています。

さて、京都といえば百鬼夜行や陰陽師など、怪しい物語がふんだんに出てくるまちで、平安京の歴史が今も色濃いですが、たとえば500年後の江戸時代の人は平安時代の怪談をどのように理解したのでしょう。私は江戸庶民の心もようを知りたくて、京都界隈の怪談名所をフィールドワークしました。日蓮などの宗教者が強烈な布教を行ったのは鎌倉時代ですが、江戸時代ともなると仏教界は堕落し、布教活動がいい加減だったといわれます。しかし当時の人はそんな強烈な教えがなくても、ごく普通に「なんまいだー」とか「因果なことや」という仏教用語を口にします。信仰心が深いわけではなく、仏教的な感性が体に棲みついているのです。だとすれば、怪談や怪奇な世界についても棲みついている、すなわち「あることになっている」のではないかと考えました。「今朝、死んだじいさんが枕元に出てきたよ」という話をし、聞いているほうも「ふむふむ」と納得してしまう。そのような棲みつきがもっとも加速したのが江戸時代でしょう。

江戸時代の人たちは、それまで見えないものとされていた怖い話を形にしました。幽霊が出たと聞くと幽霊画にしてしまう。プロの絵師がめちゃくちゃうまく描いてしまうので、幽霊画で有名な円山応挙にいたっては数々の伝説を残しました。あまりにもすさまじい幽霊を描いたから、見た人が気絶したとか。また、ある人が応挙に「なぜそんなふうに描けたのか」と聞くと「これは死んだ人間を模写した。だから人間の死相が見える」と答えたそうですが、応挙の美術史にはそのような事実はありません。さらに講談師が応挙を素材にした話として、京都・蹴上の料亭の主人が応挙に絵を依頼し、怖いもの見たさに客が押しかけ、傾きかけた店が復活したといい、店名まで出て非常にリアリティを感じますが、これも全部フィクションです。きわめてうまい具合に作りこんでいます。

NHK大河ドラマ「べらぼう」を見たらわかりますが、江戸時代になると出版業がさかんになり、庶民にウケる本作りが競われました。真面目な伝記より、怪談や滑稽本のほうがおもしろいわけで、そのように創作された娯楽本がやがて寄席や芝居などに上演されていきます。芝居小屋がたくさんできるのもこの頃で、エンターテインメントの要素として怪談の分野が確立したのです。ちなみに芝居小屋では夏、幽霊劇をやることがお決まりでした。真夏は小屋の中が暑くて客の入りが悪いため、死んだ人が帰ってくるお盆を意識し、鳥肌がたつような演目で集客しようとしました。幽霊役の人間離れした軽業が話題になり、たいそう人気だったようです。

怪談は人間らしく生きるために欠かせないもの

怪談はかわら版という形でも広まっていきました。天保9年、京都で売られていたかわら版によると「但馬国から京都三条の商家に奉公していた女は、病気の夫を養うため一生懸命働いていたが、国元にいる夫の病気はとっくに癒え、若い娘と所帯を持っていたことが発覚。女は嫉妬のあまり鬼になり、死んでしまった」という話が描かれています。この話のポイントは「…という話があった」ではなく、「そういう夢を見た。この話は確かなのか」と夢落ちで終わっています。恐れられた怪談が半分冗談でも成立するという戯作になっており、もはやお化け屋敷の感覚です。

令和の現代も怪談朗読会が各地でにぎわっています。実話っぽい語りもあれば、我々のように作りものであることを前提に、ネタあかしをしながら解説する催しもあります。私は旅巡業と称して、その土地の不思議な話を集めていますが、有名な説話集・遠野物語に明治時代の震災の話が出てきます。「震災で亡くなった妻が夜、幽霊となって出てきたが、隣村で一緒に津波に流れされた男が横にいた。自分と結婚する前に付き合っていたらしく、妻に対する未練が吹っ切れた」というとても人間くさい内容でした。こういう話を残したのは印象的で、災害において怪談をどう設定するのか、背景や人の心情が重要なファクターなのでしょう。怪談は小説におけるひとつのジャンルです。小説や映画はなんのためにあるのかというと、人間が感情のある生き物として自覚するために必要なもの。人間らしく生きるために欠かせないものとして感情を発露してくれるそれが文学なわけです。

最後に。私は怪談フィールドワークでゾッとした経験はないですが、母親が死んだとき、不思議なことがありました。遺体を寺に預け、その晩実家に戻ったところ、僕の後から弟が玄関に入ったとき、自然に閉まるはずのドアが開いたままだったんです。「あー、おふくろが戻ってきたのかな」「今日戻っても寝るところがないよ」と話し合っているとドアがスーッと閉まりました。僕たちが困ったので几帳面だった母はドアを閉めて帰ったのでしょう。私は常々、死んだ人より生きている人のほうが怖いと思っています。人間関係でしんどそうになったとき、ストレスで病まないよう死んだフリをしてやりすごしました。効果があったので学生諸君に勧めています（笑）

写真上／天保9年版の読売り（かわら版）
木版1枚刷り〈縦23.0×横31.4cm〉
個人蔵（堤邦彦）
右端に「京師ニテウルトコロ」「留吉求来ル」と見え、洛中の辻売りから買い求めたものであることがわかる。心中、天変地異、奇聞、仇討ちの類を1枚刷りにして市販したこの種の刊行物を読売り、絵草子と呼んだ。

写真左／京都怪談巡礼（淡交社）